

見過ごされていた隠れた繋がりが見つかる、私は歴史研究の醍醐味はそこにあると思っています。

卒論・修論とガヴァネスを研究しましたが、この頃私は、これほど面白いテーマは他にはあるまいと思っていました。他のテーマを研究している人は気の毒とまで思っていた位で、この後は何を研究しようかというのが唯一の心配事でした。ですがこのような心配は全く必要ないことでした。歴史の研究というのは、確かに昔々のことを研究するものですが、常に研究する個人の関心を反映してあります。ガヴァネスというテーマに当時の私が夢中になったのは、友達が就職または結婚していく中で、自分はどういう人間なのか、自分はこういったものの見方をするのかを模索していたことと表れなのでしょう。歴史の研究をすること、いわば「自分探し」をしていたのです。そして自分自身が成長した時、また新たな問題意識が生まれ、自ずと違ったテーマが見つかるように思います。

## 彙報

同じように、歴史研究は常に現代社会の問題意識や価値観を映し出しています。イギリスでも、一九六〇年代に左翼の運動が盛んになった時には労働史、女性運動が盛り上がった中では女性史研究が発達してきました。ダイアナ妃のスキヤンダルが社会を賑わせた時には、歴史上の王室スキヤンダルを見直す研究が相次ぎました。スコットランドの自治や、EUの問題がクローズアップされる中、イギリスのナショナル・アイデンティティに関心が集まっています。新しい視点・視角から何度も何度も読み取り直す、そしてその成果は今の社会に還元することができのです。だから常に新しいし、飽きないのです。

もちろん、大学院に進んで研究者になる人はごく一部でしょう。ですが、見回すと学部生の研究にも、ヴィクトリア期の女性観を当時の女性運動家のドレスの色から研究するものや、美術館のコレクションからイギリスのナショナル・アイデンティティを探るものなど、独自の視点を活かした意

欲的な研究が目につきます。また、日常生活の中に西洋史研究から得る楽しみもたくさんあります。読書や美術館巡りは、時代背景を知ることでも何倍も面白くなりますし、海外旅行の楽しみも倍増するでしょう。

歴史研究に少しでも興味のある方は、西洋史専修室をのぞいてみて下さい。このシンポジウムを期に大学院生や若手教員と学部のみなさんとの交流の機会が増えればうれしく思います。

## 私の考古学ことはじめ

小 高 敬 寛

私は高等学院在学時に、ミノア文明やキュクラデス文明といったギリシアの青銅器文化に興味をもち、第一文学部に入学しました。その煌びやかな工芸品に魅せられていましたので、専修進級時には美術史と考古学のどちらに進むべきか迷いましたが、結局のところ何となく考古学専修を選択することにしました。

進級してまず驚いたのは、小学生や中学生の頃から近くの遺跡に出かけて土器を拾ったり、高校生の時には専門書を読み漁ったりしていたような、古風にいえば「考古ボーイ」と呼ばれる輩が同級生のなかに数多くいたことでした。実際、何も知らないまま専修に来てしまった私にとって、彼らは別世界の奇人な人々に見えましたし、自分の無知を恥じて引け目を感じてさえました。しかし、毎日のように専修室に入り浸っているうちに、そんなつまらない劣等感はいだいに薄れていったものです。

専修室にはいつも大学院生や専修の先輩がたが集まっていて、勉強や学界のことはもちろん、プライベートなことや単なる雑談にいたるまで、いろいろな話をしていました。私を含めた下級生が物欲しそうな顔をしてたむろしていると、先輩がたは「メシ食いに行くか？」と声をかけて下さるので、しょっちゅう飲み食いに連れていってもらっていました。酒の大好きな私は単純に飲み食いできることも嬉しかったのです

が、こういった場で聞く先輩がたや同級生たちの話は新鮮で刺激的なものばかりでした。考古学のことに限らず、多くのことをこうした付き合いのなかで学んできたと思います。

話は変わりますが、そうこうしているうちに私は発掘調査にも参加させていただくようになりました。初めて参加した調査は西早稲田三丁目遺跡の第二次調査地点というところで、現場を指揮されていたのは大学院の先輩でした（現在は先生として活躍されています）。この遺跡はその名の示すように、早稲田通り脇の大学の近くに所在していました。実は早稲田大学付近というのは東京都下でも有数の遺跡が眠っており、たとえば現在中央図書館が建っている場所は全国的にも著名な遺跡として知られています。西早稲田三丁目遺跡も弥生時代から古墳時代にかけての良好な資料に恵まれていたので、それまで本のなかや博物館、観光地だけでしか知らなかった考古学という学問そのものが、なんだか急に身

近になった感じがしました。

しかし、作業に加わってからの数週間は、先輩がたの掘り出した廃土をベルトコンベアまでひたすら運ぶという仕事だけをやっていた気がします。実際、まるで技術のない私に任せられる作業といったら、それくらいのことしかなかったのでしょうか。当時は早く発掘調査の技術を身につけたくて焦りを感じていましたが、遺構を掘り起こし、図面を作成するといった仕事はなかなかやらせてもらえませんでした。ただ、発掘調査が必要とする厳正さや集団行動における規律は、活躍する先輩がたを羨望の眼差しで眺めているうちに覚えていったのだと思います。数多くの調査経験を積んだ今では、この西早稲田三丁目遺跡で学んだ「現場の空気」が確実に糧になっていることを確信できるようになりました。

私が現在勉強しているシリアには、一九九六年に初めて足を踏み入れました。夏休みにシベリア鉄道に乗ってユーラシア大陸を横断し、憧れていたギリシアから近東を

抜けてエジプトまで旅をする、という計画を立てたことがきっかけです。とある先生がシリアで発掘調査に携わっていることを知った私は、旅の途中で遺跡を見学させて

いただこうと思い、お願いをしに行きました。ところが、返ってきたのは「それならば夏の二カ月間、発掘調査に参加せよ」という思いがけない言葉でした。高校生の頃からこの旅のためにアルバイトをしてお金を貯めてまでいたのですが、この降って湧いてきたかのような幸運に、私は迷うことなく計画を捨てて直接シリアに向かうことを決意しました。以来、ほぼ毎年この国で調査に従事しています。

あちらではいつも数多くの人々に助けられて生活しています。私のような若輩者は一人では何もできませんので、周りのみんながいろいろと世話を焼いてくれるのです。彼らに囲まれていると、結局のところ私はこれまで多くの人々との付き合いのなかでここまでやってこられたのであり、そしておそらくこれからもうであろう、と感じ

ます。いわんや、我々文学部の者が目指すのは人間というものを理解することです。みなさんもぜひ、多くの人々と接して有意義な学生生活を送ってください。

#### ○平成十四年度卒業論文要旨

##### 〈日本史学専修〉

### 日本古代の塩

向 林 八 重

#### 一 はじめに

日本古代の塩についての研究は、考古学においては、土器製塩や製塩土器の分布・編年などを中心に進められ、文献史料が乏しい古代の塩業史を大きく発展させた。歴史学においても塩業史を中心に研究が進められたが、塩の価値や塩に対する国家意識などについては十分な検討がなされてきたとは言い難い。

塩は人々の生活にとって必要不可欠なものであり、塩を通して国家の動向や人々の用途等が見えてくると思い、卒業論文のテーマに古代の塩を取り上げた。

卒業論文では古代の塩について「六国史」を中心に見ていき、そこから、塩を扱う国家の意識を明らかにすることを目的とした。第一章では、「六国史」の塩関係の条を製塩・分配・軍事の三つに分けて、その特徴を論じ、そこから塩に対する国家意識を考察した。第二章では、「六国史」の中にも現れる「顆」「果」という単位と、これまでに貧者の塩と捉えられることが多かった堅塩について論じた。そして第三章では『日本三代実録』貞観十二年十二月二十五日壬寅条を手掛かりに、塩と労働の関係、そこに見られる国家意識を考察した。

ここでは、紙幅の関係上、卒業論文の第三章の要旨を簡潔に述べていきたい。

#### 二 工匠・役夫への塩の支給

塩と労働に関しては、これまでも先行研